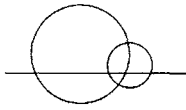


〈感想〉



やなせたかし氏の講演を聞いて

東亜同文書院大学記念センター
リサーチアシスタント 高木秀和

2008年11月23日、福岡市天神の「アクロス福岡」大会議室において当センター主催による講演会が開催された。うち第一部は、「アンパンマン」で知られるやなせたかし氏が「アンパンマンの正義」と題した講演を行った。当センターでは講演会の参加に際し、事前申し込み制を採らせて頂いたが、広報がやや遅れてしまったために申込者が少なく、当日どれほどの人数が集まるのかは未知数であった。ところが当日蓋を開けてみると、事前に地元紙である西日本新聞に大きく今回の展示会が紹介されたこともあって会場定員以上の230名前後の参加者があり、スタッフ一同がてんでこ舞になりながら対応した。このことから、福岡とその周辺にお住まいの方々の東亜同文書院への関心の高さがうかがえるとともに、やなせたかし氏の講演を聞きたいという方々も多かったといえるだろう。そこでこの小文では、やなせたかし氏の講演内容を振り返ってみたい。

やなせ氏はアニメ主題歌「アンパンマンのマーチ」を歌いながら登場し、さらにその勢いでメロディーに乗って自己紹介を歌いながらアンパンマンのイラストをホワイトボードに描いてみせた。会場はやなせ氏のパフォーマンスを楽しみつつ、どんな話が始まるのだろうと子どものようにワクワクしながら本題に入るのを待った。

やなせ氏はまず、御尊父である柳瀬清氏（東亜同文書院第13期生）の半生を話された。清氏は32歳の若さで亡くなってしまいが、「大旅行」で

巡ったルートと、やなせたかし氏が戦時中に徴兵されて訪れた場所が中国東海岸（浙江省など）ということではほぼ同じであり、やなせ氏は亡き父親に引き寄せられたと感じたという。そのようなことから「縁」や「運命」という言葉を強調され、最近のやなせ氏は講演を頼まれるたびに病氣療養中のために来られないことが多いが、この福岡での講演会にはやって来ることができたという意味で、来場した聴講者との「縁」を感じられた。

さらに話は「アンパンマン」の誕生へと移った。やなせ氏は大陸に出征されたが、暴行や略奪などの「悪魔」の行為は決してしなかった。しかし、戦争が終わってみれば日本軍は「悪魔」であり、何が「正義」なのかが分からなくなった。また、徴兵中に一番辛かったことは飢えであり、「正義」とはまず餓えた人を助けることから始まると考えた。そこで、お腹のすいた子どもに自分の顔の一部を取って差出す「正義」のアンパンマンが生まれたのであった。

しかし、アンパンマンを絵本作品にした当初は大人たちの評判が悪く、まわりの対応は冷淡そのものであった。けれども、それを読む子どもたちは夢中であり、それを知った大人たちはガラリとその態度を変えたのだ。テレビアニメ化の際にも資金の制約や視聴率の取れない時間枠に押し込められたが、子どもたちがいるお茶の間の人気者になった。やなせ氏は、「質が良ければどんな劣悪な条件でも大衆は認める」と語った。

講演の後半部分は、米寿祝いに作った歌や、「アカシヤの木の下の犬」というタイトルの物語を歌とイラストで披露し、互いの欠点を認めながら生きていく社会の大切さや、人生の短さやはかなさを語った。そしてやなせ氏は、たくさんの病気をしながらも、生がある限りは一生懸命何かに取り組むことにし、それを人に喜んでもらうことに定めた。人を喜ばせることが自分の喜びであり、自らの歌や絵を見聞きした人が「面白い」や「楽しい」という感想を持ってくれることでやなせ氏自身も喜ぶ。だから人は、「喜ばせごっこで生きている」という考えに達した。

このようなやなせ氏の姿勢は、終始講演の間でみられ、御高齢で病身でありながらも全身で聴講者を楽しませようとしてくれた。講演の最後に、やなせ氏は分かりやすく明瞭な言葉で伝える表現力の大切さを語ったが、同氏の聴衆にストレートに分かりやすく訴えかけるという長けた表現力がわれわれを「やなせワールド」に引き込み、あっという間に講演が終わったのだった。

追記 本年報内にやなせ氏の講演のテープ起こしが収録されている。あわせてご覧いただきたい。



やなせ氏の講演に聞き入る聴衆たち